

看護の原点

「え…？もう一度、言ってもらえますか？」

私は、何度も何かを伝えようとする患者さんの言葉が聞き取れなく、思わずもう一度聞き返した。しかし患者さんは諦めたように、そっぽを向き二度と言ってはくれなかった。私は患者さんの前で立ち尽くし思わず、「すみません。」と言ってしまった。

私の初めての實習で担当になった患者さんは脳梗塞を患った、男性のご高齢の方だった。後遺症で構音障害があり、話しかけると内容は理解しているものの、言葉を発することが困難なようだった。私はこの患者さんと出会った当初からやはりコミュニケーションがうまくいかず、この患者さんの思いを理解するのは難しい…と内心諦めていた自分がいた。

しかし、そんな自分を変える出来事があった。ある日、私の實習指導の看護師と、その患者さんの清拭を行った。それを終え、片付けをしている時、患者さんは看護師に何か言いたそうにこちらを見ていた。看護師は、歩み寄り、身を屈め、患者さんと同じ高さの目線で言葉が出るのを待った。患者さんは懸命に何かを言おうと口は動いているものの、なかなか言葉が出てこない。しかし、それでも看護師はじっと、温かい眼差しで患者さんを見守り続けていた。何十秒、いや1分程、経っただろうか。やっと、患者さんは絞り出すような、かすかな声で言った。「ありがとう」と。それは、伝えたくても伝えられない患者さんの意思が看護師に通じた一瞬だった。

この看護師は、患者さんの伝えたくても伝えられない思いに寄り添い、忍耐強く向き合ったのだ。私はこの看護師の行動を見て、私自身はっと、気づかされた。果たして、自分はこちらから患者さんに歩み寄って、寄り添い、向き合おうと努力しただろうか。コミュニケーションが難しいから、患者さんは何を考えているのかよくわからないと、諦めかけていた自分を深く反省した。

この實習の経験を通じて、まずは看護師の相手の話に耳を傾けよう、理解しよう、という心構えが大切なのだと学ぶことができた。病を抱えた患者さんは何かしらの思いを抱いている。不安、悩み、苦痛、もどかしさ…。看護とは、そういった患者さんの思いに耳を傾け、看護師自らの関心を100%患者さんに向け、寄り添うことだと思う。看護師は患者さんの様態への身体的なケアに加え、そういった心理的、精神的な側面から支え、患者さんの心と向き合うことが大切だ。

将来、看護師として、果たして私は何人の患者さんと出会うだろうか。関わる一人一人の患者さんに、寄り添おうという一心な姿勢を大切に、患者さんと向き合っていきたいと思っている。